

私のアソコに無理やり
捻じ込まれてくる触手

サイズの違いは明らかで
アソコの肉が悲鳴を
上げているのが分かる

「痛…っ!!」

「入らな…っ…い…からあ…っ!!」

「女のごこは
そう簡単に壊れないわ」

「あ…ぐ…!!
無理
無理
無理
いいっ!!」

「今から穴を広げて…っ」

「ほらっ!!!」

「おちおち」

「あああああああああ…っ!!」

肉の裂ける音と
同時に上がる悲鳴

綺麗に閉じられた
私の処女宮は――

たった一度の侵入で
破壊されてしまった…

「あはっ!!
すっくらすっくらちゅ
とわりちゃんの中!!」

「やめ……っ」

「あ……あ……!!」

「抜いて!!
抜きなさいよ……っ
あぐっ
ひっぐうううっ!!」

「何を言ってるの?」

「これからじゃない
私の子作りはね!!」

「あ……っ!!」

「あ……っ!!
嫌に……決ま……て……る……
でしょ!!」

「あ……っ!!」
子宮ごと突き破りそうな
くらい激しい輸送に
私の下腹の肉は
盛り上がってしまった

「そろそろ射精すわよ
たっぷり受け止めなさい!!」

「な……っ!!」

「射精す」死刑宣告に
聞こえたその言葉に
私はあらんばかりの力で
抵抗する

でも、力の落ちた私では
拘束を解くことは叶わず……

「一番奥で出してあげる!」

「子宮の中で……」

「いやーイヤアアッ
そこは……
レックスの……っ!!」

「……ね!!」



流れ込んでくる
精液の濁流

目を見開き、悲鳴を
上げながら私は
痙攣していた

「あははっ!!
沢山飲みなさい!!」

「ほらほらあつ!!」

「ひっくぐううう…子宮に…
子宮の中に
入っできてる…!!」

「こんな…
…こんなあつ!!」

子宮口を突破した
触手の精液は
あっという間に
子宮を満たしてきた

怪物は静かに私を
見て納得した…

「ああ…なるほど…」

「エーテルで排卵を
『抑制』していたのね…」

「無駄なことを…」

「は…は…は…」

「子宮に入れた種が…」

「…あら
すぐに受精するはずなのに
孕むにはちよつと
足りなかつたかしら…」

「そんなに受精が嫌なら
体験させてあげるわ」

「やめ……っ!!」

1本:2本と
無理やり入り込んでくる
触手たち……

「ああああああああああ……!!」

「ひぐう……っ!!
あ……あ……あ……
無……駄よ……っ」

「排卵……だけは……
するもんですか!!」

「ビカリちゃんの
子宮内で起こる
楽しいシヨールをね!!」

地面のいたる所から
現れてくる触手が
私の大事な場所目掛けて
殺到してくる

「おははははは!!」

最後まで諦めない……
それがレックス達と
旅を経て得た私の希望……

容赦なく入り込んでくる
触手に、再び女の最奥である
子宮の中まで貫かれる
私は排卵を防ぐために
卵巣にエーテルを
集中させていた

「!?」

犯されながら
突如頭の中に突如
ビジョンが流れてくる

体の中、子宮の奥……
そして私の最後の抵抗先……

卵巣のビジョン

なにこれ……
頭の中に直接……
これって……

しま……っ!!
制御が……っ
うあああああ!!

抑え……きれ……ないっ

ただでさえギリギリの所で
耐えていたのに
突然脳内に映し出された
ビジョンと

だめ!!
耐えてっ!!
今排卵したら
私は……もう……っ!!

「あはっ排卵したわね」

同時に私は惨めに
絶頂した……

子宮壁が突き破られる
と錯覚するほどの
衝撃が私を襲う

そして排卵を抑えていた
卵巣は制御を失い……

「ふちゅっ」と……
惨めな敗北の音が
子宮内で響く……

「さあビカリちゃん」

「孕みなさい!!」

それはコアを通して
流れ込んでくる
今現在、私の子宮内で
起きている出来事…

ありえない速度で
「私」という卵子に
群がってくる
おぞましい怪物の
姿をした精子たち…

必死に逃げようとするが
私はほとんど動くことが
出来ず、すぐに追いつかれ

あつという間に
囲まれてしまう

ついうに化け物たちの波は
私に到達した

そこには受精という
神秘は一切存在しない
異様な光景

「一方的な蹂躪」と
「輪姦」による
「強制受胎」

精子たちは卵子である
私の体を取り込みながら貪り

胎内を犯し尽くしてくる

痛みはない…
代わりに
今まで味わった
事のない快楽

「びっ…な、何よ…あれり!!」

「あれが精子…なの?」

「この…つ!!」

「く…来るな!!」

化け物は
核である私の
「最後」の守りである
卵膜に牙を立てきた

「だめっ
入ってこないで!」

「あっちへ行きなさいよ!」

次々と膜に牙を
立ててくる
異形の精子達

「ああ…そんな…」

力のない膜は一瞬にして
食い破られ、次々と化け物が
私目掛けて殺到してくる

「いや、いやあああつ!!」

「私の中に
入って来ないでっ!!」

「あああつ!!」

「いやあつ」

「やう!!
イクっ!!耐えられないっ!!
イクグウウウウうううっ!!」

絶頂を迎える都度
飲み込まれ
急速に奪われていく力…

そして

意識が戻るとそこには…

「あははっ
どうだった
ヒカリちゃん？」

「精子達に
ぐちゃぐちゃに
犯された気分は？」

「ホムラの姿をした
化け物が満足そうに
微笑んでいた」

「う……あああ……」

犯し尽くされた私は
指一本動かさないほど
疲弊していた…

「ちょっとコアを介して
犯しすぎたかしら」

「これで私に完全な
力が手に入る…」

「ああ…早く出てこないかしら…」

「孕んだ」

お腹の中で蠢く胎動…

「ああ…楽しみだわ
ヒカリちゃんから
産まれる力…」

「でも、目的は果たしたわ」

だらしなく広がった
秘所からは
吐き出された精液が
溢れかえっており

さっきのまでの凌辱が
嘘ではなかったことを
物語っている

体中のエネルギーが
その胎動の主に
奪われていくのを
感じる…

その事実が
私の心を更なる絶望に
突き墮としていく…

あれから何度も
触手で犯され…

絶頂させられ…

孕まされて…

そして…

6匹目を産んだ頃…

最愛の人の名前を
うわごとのように
呟く私の体は怪物の
精液まみれとなっていた

アソコは囚われていた
ホムラと同じくらい
ひどい有様となり

膣は醜く開き
短時間で複数回
出産したのもあり
子宮口も押し出され

羊水と精液が混じった
液体を涎のように
垂らしていた

ホムラに似た怪物は
私から産まれた
5匹を取り込むと

さらにその姿を変えて
私とホムラを
残してどこかに
行ってしまった…

「最後の仕上げを…」
そう言い残して…

その言葉の意味が分からないまま
私の膣は、壁から出てくる
新たな触手の凌辱者を
ただ見つめる事しかできなかった

